

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

韓国の大学教育改革の方向性問題について

著者	金 東光
著者別名	KIM Dong Kwang
雑誌名	アジア文化研究所研究年報
巻	41
ページ	35(58) - 45(48)
発行年	2006
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00009361/



韓国の大学教育改革の方向性問題について

金 東 光

はじめに

今、世界中の国々では教育改革に関する議論が活発である。これは21世紀の知識基盤社会を迎え国々が教育を国家経済競争力を増大させるための鍵と見なしていることの現れであろう。韓国も例外ではなくこのようなビジョンに大きい希望を託している。資源の乏しい韓国にとって教育で優秀な人材を育て国家繁栄の柱にしようとするのは極めて当たり前の考え方かもしれない。

2006年10月現在、韓国政府の取っている教育改革についての方針はその根幹が金永三政権のときに敷かれ、金大中政権に概ね受け継がれ、これに若干の修正が加えられたものである。これは新自由主義をその政治経済的な思想の支えとするもので、教育を国家、またはその経済発展の道具と見なしている⁽¹⁾。国家間の様々な壁が崩れ世界が一つの巨大な市場で結ばれた現状を踏まえ、教育を国家発展や経済開発のための戦略の中心に置く韓国政府の考え方はその有効性を認めることができる。それにしても教育の道具的な一側面ばかりを強調する韓国政府の教育改革方針には問題があると感じるところである。

憂慮すべきは政府の方針だけではない。教育、特に大学教育に携わる者や学生のなかでも、教育とは職を得る方便、つまり職業訓練であるという考え方が広がっている。大学は真理探求や人格陶冶の場という教育観はもはや学生には古臭いものになってしまった。多くの大学生や大学院生が大学に来ては就職のための勉強をして

いる。高校は受験勉強、大学は就職勉強という教育の現状を見て、心ある者はその異様さを感じざるを得ないだろう。ひょっとしたら、われわれは心ある者が異様に感じられる時代に住んでいるかもしれない。教育の現状が歪んでいる状況のなかで、韓国政府が掲げている方針通りに教育改革がうまく実現できるかについては疑問がある。本稿で私は韓国の大学教育改革についての議論に考慮されるべきことを述べてみたいと思う。

I. 教育に対する韓国社会の文化的な期待

近年行われた幾つかの国際学力比較評価で、韓国教育については矛盾する結果が出た。

OECDが2000年と2003年に行った中、高校生の学力を測定するPISA調査において韓国は総合2、3位を占める好成績を上げた⁽²⁾。もう一方では、西洋のメディアが調査した世界有数大学200校のなかに韓国の大学はほんの一握りしか入っていないことが明らかになった⁽³⁾。韓国の高等教育の殆どすべての分野を制覇してきたソウル大学が世界大学ベスト100にも入らないという不名誉は韓国社会に大変な波紋を呼び起こした⁽⁴⁾。隣国日本の東大や京大がそれぞれ12位、29位を、中国の北京大学が17位を占めたことは韓国の高等教育関係者には大きなショックだったようだ。

そもそも韓国のような開発途上国が、中等教育に限ってではあるが、国際学力比較評価で先進国に勝る優秀な成績を上げたこと自体が驚くべきことである。しかし、これと対照を成す韓国高等教育の低調さはどのように説明できるだ

ろうか。もちろん、この二つの比較調査は同じ性質のものではない。PISAは数学、科学、読解力、問題解決能力といった分野で試験を実施し、高校生の学力を測定して国家間の比較を行った厳密な調査である⁽⁵⁾。世界大学ベスト200はイギリスのタイム誌が国際的に影響力のある教育者、研究者に世界中の大学についての意見を聞いて得られた結果である。評価の基準として各大学の論文数、引用度、教授対学生の比率、設備の充実等が使われているが、これはあくまでも専門家の主観的な評価である⁽⁶⁾。これは関連国家の国家的認知度が大きく作用したランク付けで、厳密な意味での大学生、大学院生の学力比較調査ではない。しかし、それぞれの調査の具体的な詳細はともかく、OECD国家のなかでトップレベルの中等教育と最低レベルの高等教育とを同時に有する現象は韓国にとっては愉快なことではなく不安や悩みの種である。

如何にしてこのようなギャップが生じたのだろうか。私は中等教育と高等教育の間のこの極端な差は韓国社会の教育に対する期待という文化的な要素で説明ができると思う。基本的に韓国人の教育に対する関心は出世のためである。つまり、教育は就職、安定した社会的、経済的な地位の確保、社会階層の移動、名誉を得るための手段と見なされている。韓国の中学生、高校生は彼らの学生時代をもっぱら受験勉強で明け暮れている。もちろん、受験勉強は大学に入るための勉強である。どの大学をどの専攻で入ったかが学生の社会における成功を決定的に左右し、その影響が全生涯を通じてその人に付き纏う文化的な土壌のある韓国では、受験勉強に明け暮れないのが異様に思えるほどである。中学生・高校生を抱えている家庭の私教育費は天文学的な水準で、これこそ世界トップレベルであるし、生徒たちが勉強に投入する時間もまた世界トップレベルに達する⁽⁷⁾。これでPISAで韓国の中・高生徒が学力測定分野で世界トップレベルに近い成績を上げていても不思議はない。

高等教育になると状況は違ってくる。大学入学段階で学生たちの人生は概ね決まる。厳しい

受験戦争の後の勝者や敗者に暫く韓国社会は何も言わないし言うこともないようである。その結果、韓国社会、つまり、普通の韓国人たちは高校生に要求したような厳しい勉強を大学生には期待しないようだ。それで競争を勝ち抜いた大学生たちは高校時代の犠牲を補うかのようにゆったりとした時間を過ごすのである。ここまでは韓国においても日本においても陳腐な常識である。しかし日本と異なる韓国の状況がある。日本は近代化した歴史が韓国のそれに比べ2倍もあるし、不幸な世界大戦に終わったとはいえ、西洋列強と争うなかで人材を育てる教育機関としての大学の内実を図ってきた経緯がある。その蓄積は夥しいもので、今様々な面で揺れ動き蹢躅しているとはいえ、独自の学問的な根幹と伝統はしっかりとしたものである。東大や京大が世界ベスト20内に入ってもなんの不思議もない。ソウル大学を始めとする韓国の大学がその歴史の短さ、独自の高等教育伝統の浅さを補おうとするならば、先進諸国を凌ぐ格段の努力をしなければならない。しかし、これは今の韓国では行われていない。韓国の大学はそろそろ就職を求める大学生の、また学部卒業の際就職できず一時身を預けている大学院生の溜まり場なのである。タイム誌の調査に表れた韓国大学の順位はこのような韓国高等教育の現状を捉えたものである。

繰り返すことになるが、国際比較調査における韓国の中等教育と高等教育との間のギャップは韓国人、韓国社会の教育に対する文化的な期待に起因する現象である。韓国が豊富で安い労働力を動員し国際市場に安い製品を供給しても経済が維持できた時代では高等教育に対する今までの期待でよかったかもしれない。しかし、韓国は世界でも稀に見る急激な超高齢化・超少子化時代を迎えた⁽⁸⁾。豊富で安い労働力はとくに消え、伝統的な商品市場においても中国、東南アジア諸国等の後発開発途上国に迫られている。韓国の技術は先進国のレベルには達していないし、後発開発途上国との格差もそれほど大きくない。こうした状況のなかで韓国政府や

教育関係者が教育の質を高めようとして教育改革を唱えるのは当然のことである。問題は彼らが韓国高等教育のネックになっている文化的な要素の改善に取り組むより、教育の制度や技術的な側面ばかりを弄くっているところにある。確かに制度は文化より取り組みやすく、成果も可視的である。しかし教育制度ばかりを弄くって生じる効果は長続きしないし、今韓国が切に必要とする高等教育の質的な飛躍には及ばないものである。

Ⅱ．韓国大学における教育機能の低下

21世紀は知識基盤社会であり、この社会では知識が科学と技術の発展を主導し、進んだ科学、技術は経済の発展につながる。故に知識は経済を牽引する動力である。このような考え方を持って韓国政府と教育関係者が教育改革を主導していることは上で述べた通りである。この考え方は基本的に間違っていないが、大げさな側面が強いことも指摘した。なぜならば、どの時代も知識は経済発展の鍵の役割を果たしたからである。これは昔も今日も同じで、21世紀ならではの現象ではない。20世紀後半から始まった情報科学・技術によって知識がより高速で増え、発達していくことは言える。知識の経済に対する重要性が益々大きくなっていくことも言える。しかし、だからと言って、過去における知識の経済に対する重要性を否定するわけにはいかない。21世紀は過去と比べて性格の異なる社会ではなく、様々な面で度合いが深まる時代である。経済に対する知識の重要性は大きくなる一方で、社会的な問題もその複雑さと解決困難さの度合いを増していく。

このような時代的な背景を背負っていても、教育の道具的な側面ばかりを強調する見解は如何に先見性に欠けているかを見抜くのはそんなに難しいことではない。伝統的に教育は社会の構成員一人ひとりに良き生き方を教えようとし、集団の間では共存の徳を説き、人間の只なる存在を文化でまとめ共通の意味の場を提供してきた。知識は共通の意味の場としての文化のなか

で生存のための一役割を果たし、生活の利便性も高め、個人には生きることを意味を教え、文化そのものをより良い方向に発展させることにも貢献してきてきた。教育は、知識を単なる経済の道具として取り扱う以外に、もっと大きく大事な役割を持っているのである。そうだとすれば、21世紀における教育改革は教育の本来の機能を活かす以上のものでも、以下のものでもあり得ないはずである。このような観点から考えると、大学教育改革の焦点は大学の本来の機能—学問研究と人格陶冶を含む教育—の正常的な維持の確保に置かれるべきである。今流行の、人格陶冶云々は21世紀の大学の専門性を知らなすぎるとの見解はうぬぼれであろう。どのレベルでも教育は価値中立的なものではなく、価値指向的である。

私は韓国の大学教育改革は大学の本来の機能の維持または回復から始めるべきであると考え。時代が流れるにつれ、教育の面においても当然調整すべき点が現れてくる。教育の最適化のためにはどの時代も調整や改革を必要とする。しかし、韓国の大学教育の場合、時代の流れにより生じるズレ以外にも、研究や教育といった大学本来の機能を妨げる文化的な要素が多く存在するかのように思える。その結果、韓国大学教育は大きく乱れている。特に、次章(Ⅲ．大学教育を妨げる韓国文化の負の要素)で述べるが、学部教育はその正常な機能がかかなり低下している。それゆえ私は21世紀における韓国大学教育の改革は広く文化的な側面を視野に入れ、悪しき部分の除去ないし改善を目指し、良き部分の活用を強化すべきであると考え。確かに、大学教育の質的発展は韓国政府や教育改革論者の願う経済発展に貢献する。しかし、韓国社会の負なる文化的な要素が大学教育に申し掛かりその順機能を抑えている今、改革の焦点を教育の道具性と技術的な問題だけに合わせようとする政府や教育改革論者の理論と実践はもどかしい限りである。

Ⅲ. 大学教育を妨げる韓国文化の負の要素

ここで私は韓国大学教育を異常なものにし、その順機能を弱化させる韓国の負の文化について述べたい。これらの文化的な負の要素をすべての韓国人が認めているわけではない。しかし良識ある人々の多くがそう考え感じているところによる。何よりこれらは、私自身が注目して観察した上で韓国大学教育に良からぬ影響を及ぼしていると思うようになったことがらなのである。私は、これら負の文化的要素についての考慮なしには韓国における真の教育改革はあり得ないと考える。

大学教育を妨げるこれら韓国文化の負の要素を私は次の五つの小題に分けてまとめることにする。

(1) 学生に関すること

まずは教育において一番重要な役割を演じる学生の態度について述べよう。今のところ、韓国大学生の学業に対する目立った特徴は、それが就職のための勉強であるという点である⁽⁹⁾。この傾向は韓国に西洋教育システムが導入されて以来どの時期にも存在した現象であろうが、特に資本主義の市場原理が韓国社会で本格的に根を下ろしたここ20年、つまりおおよそ1985年以来顕著に現れた現象である。ここ20年の間、大学は学生たちにとって学問を修める機関であるより、よく遊び、また就職のための準備をして去る、そういう場所に変わった。もちろん学問に関心をもっている学生が居ないわけではない。しかし、それを追求する努力の面で、例えば彼らの20、30年前の先輩たちと比べると、大分その執拗さが劣るし、いわゆる現実的問題への関心がより高いのである。

また韓国の経済発展の最高の受患者であるこの世代の学生たちは褒められることを好み、厳しい訓練を受けながら鍛えられるのを厭うきらいがある。彼らは授業のなかで自分の行った発表についても批評や批判を受けることを極度に嫌う傾向を見せている。これは面子を重んじる

儒教文化の名残なのかもしれないが、そうだとすれば、辛抱し黙々と修行を重ねていった儒教教養を積んだ昔の書生の姿はなぜ消えてしまったのか不思議である。現在の韓国の学生たちは大学での正常な教育が難しい程甘えているし、社会的地位も高すぎるように思える。

その一方で、図書館でアイスクリームを食べながら、また携帯電話で通話しながら騒いだり、禁煙であるはずの体育館の片隅でタバコを吸ったり、授業が行われている校舎の間を音を立てながら車やバイクで疾走したりする等、他人に邪魔をする光景も珍しくない。資本主義の影響力が勢いを増し拝金思想が着実に学生の身に付く状況のなかで、学問、教養、人格陶冶、規律、社会奉仕といった従来の健全な学生文化は衰えていくように思える。

(2) 教授に関すること

韓国の多くの教授たちは自分自身を上級サラリーマンとして見なしているようである。彼らにとって大学は学問や教育の場であるより便利な職場としてのイメージが優先しているようである。まず、彼らの多くには学問や教育のプロとしての執念や活動が微々であるか、或いは、殆ど見当たらない。イギリスやドイツ、アメリカのような学問、教育の先進国では、大学で職を得るためにはそれだけの実力を身につけ、その職にふさわしい業績を上げることが要求されるし、その伝統は長い歴史を通じて定着している。韓国の教授職をめぐる慣例は、長い間実力より人間関係によって支配されてきた。婉曲に「人間関係」ということばで表現されたものは、実は、大学内部の有力な教授、行政家とのコネを意味する。そのような慣例により人選をしてきて、ここ10年の間西洋の「実力主義」、「業績主義」を真似たいわゆる新しい方法での教員の採用が謳われているが、真の実力を見抜くほどの力量や能力のない既得権を得た教授たちが人事採用において結局、志願者の出身大学、論文数、また人間関係に頼るしかない状況が続いている。

上で上げた学生の問題を教授のそれに関連付けて言えば、次のようなこともある。つまり、大学院生たちはその殆どが指導教授の研究室に籍を置くため、指導教授は学生たちにほぼ絶対的な影響力を持ち、学生たちは指導教授に屈従的である。またこの学生たちは 教授研究室を使用するとか、教授の近いところで勉強することから、他の人々に対しては優越感を持つこともしばしばあるようである。このような仕組みは大学院生の学問訓練上の自立心を阻害し、また最近韓国の教育部長官の任命をめぐる事件でも問題になった学問上の「近親相姦」（教授とその教え子の間の論文の盗作、研究業績の借用問題など）の温床になっている⁽¹⁰⁾。その傍ら、韓国教育部の教授評価の一環として大学院生の担当が重要なため、大学院生にもの言えなくなった教授もいるようだ。つまり、教授が自分の地位の確保のために大学院生を募集、指導しなければならないし、研究や生活の面で大学院生に頼っている実情があるので、彼らに言うべきこと、教えるべきこと等を遠慮しなければならない不都合もあるようである。

(3) 「業績主義」

私が韓国大学教育の発展を妨げている主要因と見なしているのが「業績主義」である。これは学者や教育者の資質及び能力を彼らの発表した論文の数を「業績」として評価し、それを当の学者、教育者の任用や昇進等に適用するという制度である。それは教育界におけるいわゆる能力主義であるが、実際のところ、学者の学問的な能力を問うこととは程遠い。そもそも韓国では大学教員の任用において出身校の教授または有力者との「人間関係」が決定的な役割を果たしてきた。そういう閉鎖的な慣行から十数年前から公開的な人事採用をするように政府ないし社会が要求したのである。人事の面での古い体質が健在するなかで新しい採用方法への切り替えは確かに難しい。しかし、国の人材を養成する機関であるはずの大学が、この新しい要求を、公平で合理的な人材採用の方法を工夫し

実施するきっかけとして捉えるよりは、「業績主義」をいいことに教授志望者を非常勤講師等の形で労働力を搾取するのに用い、その基準もある人には緩慢に、他の人には厳格に適用するなど、人材を排除するのに利用するのが現状である。

また論文数で判断する「業績主義」を好意的に解釈しても問題は多い。研究に数量的なアプローチを適用する学問分野は短期間で何本もの論文を書き上げることができるが、じっくりとした観察、反省的思考、膨大な文献研究を要する学問分野は一本の論文を書く上でも長い期間がかかる。しかし論文数が物を言うのだから、研究に長い時間がかかる分野を避ける傾向が現れてくるのは当たり前である。社会や自然世界の現象のなかにはじっくりとした観察を要するものが少なくない。韓国における「業績主義」を煽る主犯格は韓国学術振興財団である。この財団は韓国の文化的な伝統に見合う学問発展のための戦略を練るより、外国、特に北米とヨーロッパの学術雑誌、もしくは、国内の学術雑誌のなかでそれ自身が指定したものに載せた論文だけが業績になるとし、その「業績」によって研究費用を支援している。

問題は、韓国の大学に多大な影響を及ぼしているこの財団の方針の下で、多くの教授が質をあまり考慮しない論文の発表に、また講義室での充実した授業指導を犠牲にしながら数多くのプロジェクトに走っていることである。韓国の大学ではちゃんとした講義やじっくり時間をかけた良質の論文は確かに評価されるが、必要な、もしくは必須のものではないのである。学術書の著述と外国の重要書物の翻訳は「業績」にならないので、それに時間をかけるのは愚かなことである。しかし、質を顧みない論文が量産され、重要原典もろくに韓国語訳されていない状況で、果たして充実した研究ができるだろうか。韓国学術振興財団が標榜し、韓国の教授たちの多くが追従するこの「業績主義」は大学の教育機能を低下させ、浅い学問的な態度を助長する形で、実は韓国の学問発展を妨害しているの

ある。

学者、研究者の資質を判断する能力を有していないそれぞれの大学は、学者、研究者の評価に当たって、彼らの出た国内外の大学の名声に頼ることが多かった。韓国學術振興財団の「業績主義」は、既存教授が既得権を維持する上でも、何かまともな基準で研究、教育に取り組んでいるかのように見させ自ら社会の批判を避けるという意味でも好都合なものである。しかし、その「業績主義」が長期的な目で実りのある研究や教育を阻害していることの付けがいずれ回って来るに間違いない。

(4) 学問の道具性

韓国の学界、教育界では学問それ自体を目的として捉えて取り組む姿勢がほぼ見当たらない。殆どの知的追求は学問以外の目的、つまり、金銭、権力、名誉、社会発展などの獲得に向けられている。私はこれらの目的が悪いと言っているのではない。学問をその自体の目的として見なす態度の不在は韓国独自の知的伝統、特に科学的伝統の不在につながると言っているのである。

最近、釜山大学で行った講演の中で、金大中前大統領は韓国にはすぐれた知的な伝統があると言った⁽¹¹⁾。彼は韓国の知的伝統で何を指しているかは言わなかった。確かに、韓国の僧侶、思想家の中には仏教や儒教のある流れについて独自の思想を築き国境を越え外国までにその影響を及ぼした者がいたことは事実である⁽¹²⁾。しかし、今は少数の専門家以外にはその知的伝統がどういう形で保存されているかを殆どの国民は知らない。またその影響は個々人の振る舞いの内で様式化し無意識な形で名残が感じられるかもしれないが、信念、価値、生き方として生活の中で活かされていない。何しろ、その伝統は科学的な伝統ではない。それゆえ、得られる利益が明白ではないか、大きいと判断されないうとき、理工系志望の学生数が顕著に減り、学問として、また産業として理工系が苦戦している現象も韓国における科学的伝統の不在と無関

係なことではない。

韓国において学問をそれ自体目的として見なす態度の不在は、学問をするのが目的ではない教授や学生を大学に呼び寄せてもいる。彼らが大学に集まる主な理由の一つは学問には真剣ではないものの、それに関連するステータスは享受したいからである。これはまた、真剣で時には激しい論争が必要な学会で、まともな論争が無い現象にもつながる。事実、韓国の多くの学会では、他人の発表や見解に対してあまり批評しないか、批評をするとき婉曲でまるっこい言い方をする傾向が強い。もちろん発表者の論旨や人格を尊敬し丁寧な言い方をするのは良いことである。しかし、やるべき批評をせず、間違っていたり弱い論理を指摘し、そのテーマについてあり得るすべての可能性を徹底的に論弁する人はむしろ異常な人のように映ったり、敬遠されることもしばしばあるようである。こういう現象は学問をそれ自体の目的と見なし、それを追求するのが美德ではない風土であるから生じるものである。事実、韓国の多くの学会では、指定の「討論者」が発表者の発表についての論評を殆ど独占し、発表者その他の参加者との質問のやりとりは形式的であるか、かなり制限されている。しばしば、“質問のある方は食事もしくは学会終了後の飲み会で発表者に聞いてください”と司会者が言うことがある。これは学会が学問に関する討論の場より、同業者同士の交際、「業績作り」の場としての役割が遥かに大きいことを意味する。

学問をそれ自体の目的と見なす態度の不在はまた、既に述べた原典翻訳の不足とも関連している。韓国には人文・社会科学の分野で重要な古典、経典的教科書の韓国語訳が甚だしく欠乏している。原典を自国語で読み、それについて自国語で思惟をしようとする姿勢はあまり見当たらない。例えば、哲学の分野について言えば、プラトン、アリストテレス、カント、ヘーゲルといった哲学者の翻訳全集は殆ど出ていない。私が確認した限り、翻訳全集が出ている哲学者はプラトンのみであるが、これもまたギリシア

原語からではなく日本語から移した翻訳のようである⁽¹³⁾。未だに名著の翻訳は日本語訳に頼る状態が続いているし、欧米で書かれた二次的な文献の翻訳は増えているが、原典の翻訳は現にかなり不十分な状態にある。現在の韓国に有効な知的伝統があれば、こういう状況を許すはずが無いと私は考える。

(5) 他の「文化的風土」

これまで述べてきたものの以外にも大学教育を妨げる韓国文化の負の要素は多いが、ここでは私に目立つものをいくつか取り上げることにする。まず、学問的な力量を持ち、研究や教育に励む人が必ずしも大学で成功しない風土が韓国にはある⁽¹⁴⁾。韓国の大学では、ある者が教授職を先占すれば、事実上年功序列なので、その人が能力がなくても、学問的な努力を別にしなくても、しいてはまったくしなくても問題なく定年まで勤めることが出来る。教授の学問活動は「業績」で評価されるが、(以前より難しくなったとはいえ)適当なことがらを論文にまとめて付き合いのある雑誌に出せば通るし、勤務年数が増えるに連れ自然に論文数も増えるような仕組みになっている。最近、韓国学術振興財団が指定した外国の、また国内の雑誌に出した論文だけが点数として数えられるようになったが、それでも状況は変わっていないし、変わるはずもない。なぜならば、外国の有数雑誌に論文を載せられるような実力を有する人はそもそも少ないし、韓国の教授に対する待遇が他の国と比べてかなり良いほうなので別に必死に努力する必要もない。また、韓国有数の大学が発行する雑誌はいずれ韓国学術振興財団に登載できるので、その大学に勤める教授は難なくその雑誌に論文を載せることができる。韓国学術振興財団への登載が論文の質を管理する一つのシステムになるかもしれないが、本質的に何も変わっていない。韓国の大学には時には公然とした、また時には暗黙のランク付けがあり、いわゆる名門大学が韓国学術振興財団に自ら発行する学術雑誌の登載願いを出せば、いずれは登載でき

る。そうすると以前と変わらぬ形で内部関連の教員の「業績」作りが可能になる。そして、どっちみち論文の質は評価しないか出来ないの、その数だけの評価が依然と威力を振るう。そうなれば、一日でも早く教授職に付いたほうがあらゆる面で有利なので、難しい分野にしがみつきの時間をたっぷりかけて勉強する美德は韓国社会には通用しないのだ。

視線を教授職の入口から出口にそらしてもまた問題は見つかる。教授たちの定年退職が国立の場合63歳で早いし、日本のように、国立大学で定年を迎えては私立大学に移って教鞭を続けることも稀なため、学問の蓄積や伝授が難しい。理工系は事情が違うだろうが、人文社会系の場合、学者が本命の学問的活動ができるのは恐らく50代後半または60代に入ってからだとよく言われる。定年の早いことから生じる大学教育への悪影響に、若い年代の教授たちの授業や研究がそのまま通用してしまうこともある。つまり、彼らの研究や授業が未熟で水準が低くても他の教員もそうだから別に問題ないと社会が思い、教員に別に期待を寄せることすらあまりないということである。また、成熟した見識や知識を持つ定年教授の優秀な労働力をそのまま葬るのは社会の生産性の観点から考えても損失である。米国のようにテニュア・システムを設け、最初から質を問い、それを通り抜けた教授が定年後も勤められるような仕組みを考えてみてはどうだろうかと思うところである。ただし、そのようなシステムを設ける際、今のようになら63歳が過ぎたら自主定年を許し、また70歳代になって活動の鈍い教員の引退を誘導する仕組みを工夫する必要がある。

他に大学教育を妨げる韓国文化の負の要素を簡単に上げれば、韓国で長い間批判的であった軍事政権的な官僚主義の習性や慣例を、今も学会や大学行政がそのまま踏襲する傾向が衰えていないことである。その結果は質を問わない教育上、学問上の画一主義である。また、最近、大学においても社会においても個人的な節制の喪失が目立つ。民主主義と不節制が混同されて

いるようである。節制がなければ学問上、教育上に自律性も欠けやすいことは言うまでもない。以上のように、教育改革を論ずる際、考慮その改善に取り組むべき負の文化要素が多いのに、制度ばかりを弄くり操ることを論じるのは空しく、もどかしいことである。

Ⅳ. 現行教育改革の方向性の問題

教育を妨げる負の文化的な要素の韓国社会に持つ意味は様々であろうが、大学に関連づけて言うならば、韓国の大学は学問ができる風土ではないことである。形式と面子を重んじる儒教的な文化風土の名残で、大学は社会的な地位と余暇を楽しむ学者ぶる人たちには打って付けの職場のようにも見える。問題は大学が知識を生産できなく、社会に必要な人材をも効率よく養成できないことの付けがやって来るということである。

最近、大統領諮問教育革新委員会の主催した「未来教育のビジョンと戦略の模索」と題する教育改革に関する国際学術会議においても議論は教育の制度や技術的な問題の改造にその焦点が合わせられていた⁽¹⁵⁾。これまたトップダウン式の発想で、官僚と学者を一つのチームに織り込み、組織的に経済の効率性を高めるための方案を模索しているように思えた。私はその学術会議で観察した限り、教育革新を主導する官僚、彼らに委託された学者たちは依然と一方的、権威的で、その場凌ぎ的な態度を脱ぎ捨てていないような印象がした。教育改革は次章（Ⅴ. 「洋魂洋才」）で述べる教育の本質という基本を考慮して行うべきである。

私は官僚と彼らに委託された学者たちによる制度の改造に反対するのではない。それに優先して実践すべきことがあること、またその後にも改革の課題が依然と残ることを指摘しているだけである。この三つの改革課題が同時進行できるものであると信じる。私は教育改革の第一歩として現在韓国の大学で目立つ教育機能の低下と学問研究の異常さを是正することを主張する。どの時代でも教育と学問研究は大学の基本

と理想を成す。それらは如何に強化されても差し支えないのである。しかし、最近の韓国の大学では教育機能の低下が目立つ。授業の質は劣り、基準は低くなり、教授にとって学部学生を育てるのはもはやハイ・プライオリティではないのである。休講が多いのも以前と比べて変わらない。今の学生たちは民主主義だから彼らの考え方や個性を認められることを欲する。それだけ教授の教える努力の効果も弱まっている。民主主義の拡大は結構なことだが、学問や教育の世界であらゆる意見や基準、判断が同じく尊敬に値するものではない。

韓国社会では常識の利かないところが多くある。規則や規定があっても守らないし、指示に従えば損をする。当たり前のことが当たり前に通用しないところのある社会である。教育革新を文化的刷新の一つの形として捉えて行うべきである。常識や合理的な思考の利く社会に変えることに教育改革は貢献しなければならない。社会が合理的になれば、官僚や委託学者たちの望む経済面での生産性や効率性も高まってくるだろう。しかし、今彼らの考えているような改革はもう一つのその場凌ぎ的な試みに終わる可能性が高いのである。

Ⅴ. 「洋魂洋才」

かつて江崎玲於奈氏はドイツの週刊新聞 Die Zeit 誌とのインタビューで真の学問の発展のためにはや「和魂洋才」は充分ではない、必要なのは「洋魂洋才」であると言った⁽¹⁶⁾。ノーベル賞を受賞した日本の研究者出身の教育者が発したこの驚くべき言葉に東洋人は注目したのだろうか。東洋における「和魂洋才」の伝統はその歴史も長く、社会運動史的に重要な貢献を為した。西勢東漸のとき、中国では中国の文化を中心とし西洋の文明を道具として発展を図った「中体西用」を唱えた。朝鮮では東学運動の最中に東洋の道を目指し西洋の技術を利用して、襲いかかってきた危機の克服のために「東道西技」のスローガンを掲げた。日本が「和魂洋才」をモットーに近代化を成し遂げたことは周知の

ことである。今日もこれのバリエーションを見ることができる。「士魂商才」とか大学が経営マインドを持つべきだとかといったものである。ある韓国の著名な教育学者が教育革新を論ずるに当たって民族教育を根幹にし普遍価値を枝葉的に教えるべきだと主張したのも、その是非は別として、「和魂洋才」のバリエーションの一つなのである⁽¹⁷⁾。

では、江崎氏はなぜ、またどのような意味で「洋魂洋才」を唱えただろうか。それは、私の解釈では、知識をある目的のために追求すべきではなく、それ自体が自らの目的であるという意味であったと考える。つまり、知識はそれのもたらす効用が目的ではなく、その内在性が目的であるということである。その内在性が目的であるというのは、知識の本来の目的は所与としての世界の理解であるということである。知識に対するこのような態度は西洋で長い歴史を持ち、その文化的伝統も深い。

西洋文化の根源を成す古代ギリシアの知的伝統はプラトンに負うものが多い。古典ギリシアにおける哲学や教育の主導権の掌握のために、プラトンとイソクラテス、またそれぞれに従う後学たちが何世紀にも亘って繰り広げた競争が西洋文化の重要な知的土台になった⁽¹⁸⁾。言わば、世界初の大学を設立したイソクラテスは、知識は国事一国の政治と経済に貢献すべきだとし⁽¹⁹⁾、学校を社会の只中に位置づけた。プラトンは知識は世界の理解が目的であるゆえ、学校を社会の周辺に位置づけた⁽²⁰⁾。学校が社会の只中にあると、その中に寄せてくるありとあらゆる波に晒され、その本来の機能を果たすことができなくなるからである。またそれには、人間は社会を離れては生きていけないし、生きている限り社会に一定の貢献を為すべきという意味合いも含まれている。プラトンの俗世に背を向ける僧侶との違いはここにある。

教育の機能に関する限り、われわれの時代は、大雑把に言って、イソクラテスのビジョンに従っている。今日、政府も、教育者も、学生たちも、父母たちも、だれもかも教育をその外的な有用

性のために追求しており、家庭、社会、国家の政治・経済的な機能の尖兵として見なしている。それだけ、社会の変動がある度に教育は負荷を加えられる。実際、学校は家庭、国家を含む社会のすべての問題を解決するように圧迫されているのである。教育に、政治経済の面での有用性ととともに、人格陶冶や全人的な発達をも期待していたイソクラテスが今日の教育の現状を見て自分のビジョンが歪曲されたとは思わないだろうか。

プラトンの見込んだ教育の社会に対する貢献は、まず、学問の批判的な機能にあったといえよう⁽²¹⁾。社会の只中で学問が営まれるとき、それは社会の様々な勢力によって操られ、本来追求すべき私心のない、偏見のない、ありのままの实在に対する研究が困難となる。逆に言えば、もはや社会の周辺に居られない研究者たちは、社会の只中に居るとしても、ありのままの知識の追求、つまり学問の批判的な機能を果たさなければならない。それこそが学問の本来の機能に充実することだし、有用性の面においても長期的な観点から大きい利益をもたらすことになる。今日、教育を取り巻くすべての勢力によって教育のこの本質的な機能が脅かされている。

プラトンの見込んだ教育の社会に対するもう一つの貢献は学生の良い人生設計の援助機能にあった⁽²²⁾。これはプラトンがイソクラテスと意見の一致を見た教育の機能である。そもそも教育とはよく生きるためのものである。この見解によれば、教育には世界についての事柄としての知識以外に、判断力と道徳性の涵養の意味が含まれている。良い判断力や価値観なしには良い人生を生きていくことは考えられない。今日の教育は人間を経済発展など社会・国家の目標のための道具と見なしており、いわゆる教育改革は人間の道具性をより一層強化しようとしているのである。プラトンは韓国を含め世界中の多くの国家で行われる教育改革を認めないだろう。

江崎氏の言う「洋魂洋才」は、プラトンの唱えた西洋のベストな知的伝統に戻れとの教えである。つまり、江崎氏は、知識をそれ自体目的

として追求するとき真の知の発展があり、知の発展があつてこそその有用性も増してくる、と言っているのだ。氏の見解は本末転倒した今日の教育の現状に対する痛烈な批判である。それはわれわれが文化の健全性を取り戻すために傾聴すべき卓見である。

Ⅵ. 結びに代えて

以上、論じてきたことを韓国における大学教育改革の方向性の問題に関連づけてまとめると次のようになる。教育改革を考える際、経済的生産性の高揚といった教育の道具性だけではなく、その本来の機能、良い人生のためのガイドをも視野に入れ、文化的刷新を図るべきである。制度や技術的な問題だけを弄くり、負の文化的な要素の改善に取り組まない教育改革に成功はない。また、偽りの業績主義を止め、出身校や過去の専攻が何であれ現に活躍している学問分野で顕在的にも潜在的にも優れた者を見つけ、真の学問的、教育的卓越を目指す方向に教育改革を持っていくべきである。その第一歩として、低下し正常でない状態に陥った講義室での授業を始めとする大学教育、特に学部レベルの教育を正常の位置に取り戻すべきであろう。韓国の大学教育改革はこのようなものであって欲しい。

参考文献

- 崔政洪,『プラトン全集』1-6巻. 尚書閣, ソウル 1973.
- 丁淳睦,「教育革新と人間観の東西洋比較」,『国会報』192 (82.10), pp.48-53.
- プラトン,『国家』上・下, 藤沢令夫訳, 岩波文庫, 2002.
- プラトン,『ソクラテスの弁明, クリトン』, 久保勉訳, 岩波文庫, 1991.
- マックス・ウェーバー,『職業としての学問』, 尾高邦雄訳, 岩波文庫, 1993.
- Grote, George. *Plato and the Other Companions of Sokrates*. Vol. III. John Murray: London. 1881.
- Nightingale, A. W. *Genres in Dialogue: Plato and the Construct of Philosophy*. Cambridge University Press. Cambridge. 1995.
- Norlin, George. *Isocrates*. Vol. I. (Loeb Classical Library) repr. Harvard University Press. Cambridge MA. 1991.
- 英文題目:**
On the Problematic Nature of Higher Education Reform Movements in Korea
- <註>**
- (1)韓マンジュン,「新自由主義教育改革の本質と問題点」, 2006年2月11日(インターネット資料)。
 - (2)PISA (学習到達度) 調査については OECD Programme for International Student Assessment のホームページ (www.pisa.oecd.org) を参照。
 - (3)2004年イギリスの The Times Higher Education Supplement (THES) が調査した世界大学ベスト200校の中でソウル大学は118位, 韓国科学技術院 (KAIST) は160位, 浦項工大が163位を占めた。同新聞の今年(2006年)の調査ではソウル大学が63位, 北京大学が14位, 東京大学が19位を占めた。
 - (4)ソウル大学の低調な成績を当時のソウル大学総長鄭雲燦氏が同大学の教授陣宛に出した釈明の手紙をインターネットで見たことがある。また, この件に関してインターネット KBS NEWS のコラム「李ドンシクの東窓を開けると」の中“井戸の中で格好をつける蛙”(2005年7月6日付)を参照。
 - (5)註2を参照。
 - (6)TIMES ONLINE の2004年11月4日付記事“Britain wins eight places in world list of 50 best university”を参照。
 - (7)OECD 教育指標(2006年)の示す韓国の GDP 対比学校教育費民間負担率は2.9%で会員国の中で最高で平均(0.7%)より2.2%ポイント高い。(「東亜日報」2006年9月13日付記事“教育費民間負担 OECD 国の中最高”を参照)
 - (8)2006年8月17日米国の非営利人口統計研究所の人口照会局 (PRB) は平均1.1名の子供を生み, これは世界最低の出産率であることを報告した。同報告によれば日本女性の出産率は韓国女性のそれよりやや高い1.3名である。「連合ニュース」2006年8月18日付記事“韓国女性の出産率世界最低1.1名<米報告書>”を参照。
 - (9)韓国の著名な進歩的知識人白楽晴ソウル大学名誉教授は2006年10月12日釜山大学で行った「それでも希望の韓半島を語る理由」と題する講演のなかで韓国大学生が学問より就職のための勉

- 強に走ることに對して憂慮を表明した。
- (10)2006年8月、韓国教育福総理内定者金ビョンジュン氏は「論文盗作」等の問題で職を辞退した。
- (11)2006年9月15日釜山大学暁原会館で行われた金大中前大統領の講演。
- (12)新羅僧元暁と義湘、李氏朝鮮の儒者李退溪の知的作業の影響は当時国境を遥かに越えチベット、中国、日本等の諸外国でも感じられた。彼らの思想は今日においても世界の哲学、宗教学徒により熱心に勉強されている。
- (13)崔岐洪、『プラトン全集』1-6巻。尚書閣、ソウル 1973。崔は日本の東洋大学、ドイツのミュンヘン大学で哲学を修学した。
- (14)マックス・ウェーバーはドイツの大学でもこのような現象があるとの指摘をした。マックス・ウェーバー著『職業としての学問』、尾高邦雄訳、岩波文庫、1993を参照。
- (15)ここで発表された論文等の資料は「未来教育のビジョンと戦略の模索」(大統領諮問教育改革新委員会、2006年9月4日～5日)と題する配布冊子にまとめられている。
- (16)これは私が15年程前に読んだドイツの *Die Zeit* 誌の記事による。私の記憶では江崎氏のインタビューは同新聞の一面全体に及ぶ規模であった。
- (17)丁淳睦、「教育改革と人間観の東西洋比較」、『国会報』192 (82.10), pp.48-53。
- (18)Grote, George. *Plato and the Other Companions of Sokrates*. Vol. III. John Murray: London. 1881. p.31.
- (19)Norlin, George. *Isocrates*. (Loeb Classical Library) Harvard University Press. Cambridge MA. 1991. Vol. I.
- (20)Nightingale, A. W. *Genres in Dialogue; Plato and the Construct of Philosophy*. Cambridge University Press. Cambridge. 1995. p.42.
- (21)プラトン、『国家』496 a-c, 藤沢令夫訳、岩波文庫。
- (22)プラトンの対話編『弁明』の全体がこのテーマに捧げられている。